

繡像

山石見英雄錄

五輯

二

遠  
2509  
35-30



遠  
2509  
35-30

復讐言若見英雄録第五輯卷之二

南海

玉藻主人編次



謎語を示きて英士を試む  
財貨を辭して窮民を賑は

爾程ニ種季ハ可樂齋さる不どふらち對ひて恭まけいひけるや。在下ハ江湖上ニ往方  
不定ぬ遠國の浮浪人ささめ。野村新十郎種季ふらちの。即是なり再生の恩を謝  
まべく。又稟試みたる解おともいふ誘や且這方へ找みぬれど。慇懃ねも請るを  
可樂齋推禁くらくさいをて。初はつめ坐まるる地方を動うごり。除とらふ答こた礼れいをぬるのみ。仕生と  
もいひも。出いでして種季しゅんせきを孰たしかとらち月成つきなりまで。腕うで袖中そでの中より。墨斗すみとうを會出あひだ  
りち完爾えんじ。野村のむら。あや初見はつけん。不ま。贈言そんごん。お作り。とまい。出いせ。

復讐言若見英雄録五



詢々れば種季奮へて弓を彎火大刀を合する術をいひ僅少學びてへ  
 翰墨の場より疎に鹿麤暴兎の邪猜をれば中らばとも必也晒ひぬひそ  
 示はさし高作の那宋の蕪東坡が作る硯蓋の銘をりといふ研石猶  
 在。峴山已類。姜女既去。孟子不來。ともものるの體は倣へざるものか  
 願ふ他日教へてといひいふ可樂齋の思ひに髀を拍响し。連かん身も支  
 あり武あり久後憑志た勇士那れ。と譽稱せむ。主人茂弥太も郷より  
 ともいふ感ふ勝ける面色を。現も和君いふ。抄嫩記。おんめめく。力量武勇  
 せをばらば。這個先生と惚ぼる。詞敵あり。源目今の回答の禪家  
 及ぬ陳文漢語で。俺們がた大俗の耳を不通。辨りねれど。  
 學問もあ。大方なぬ人よ。然て武者修行。遊學をかねて。旅宿を  
 ぬふよ。といひけるを。片頬ふ笑。可樂齋。然之主人の宣ふ。和君の  
 定めて。國々の名勝名産を。探りぬんと。猜しぬ。這丹波へ。那那谷々撃栗ふ。  
 搗栗を。索むる。與ぬん。ふ。時中を。後れ。と。父耶々撃栗。那地の家より。  
 今尚含藏て。ある。と。意衷を。既。透徹。情緒あり。げ。字を。猜語の  
 端緒。種季の心。怪み。驚け。折。牙。此。色。見。今。は。兩個  
 の意を。知る。由。於。茂弥。膝を。找。栗。本州。船井郡。高崎と  
 いふ地方より。出る。大栗。あり。其。の。四下。村の。爺々。們。較手。墜。東。西  
 形。他。名。け。他。求。る。俺。們。家。も。多。く。含藏。指。ぬ  
 其。嗜好。せ。東。西。飽。む。難。も。何。然。酒。家。が  
 家。に。復。得。が。珍。客。と。先生。の。此。遭遇。實。小。千金。此。奇遇。酒。家  
 侶。歡。び。傳。り。先。や。個。祝。を。掌。鳴。一。個。の。婢。を。喚。迹。快。々。盃。の  
 準備。後。吩咐。て。庖。福。の。方。促。き。可。樂。齋。無。益。かり。個。執。の。盃

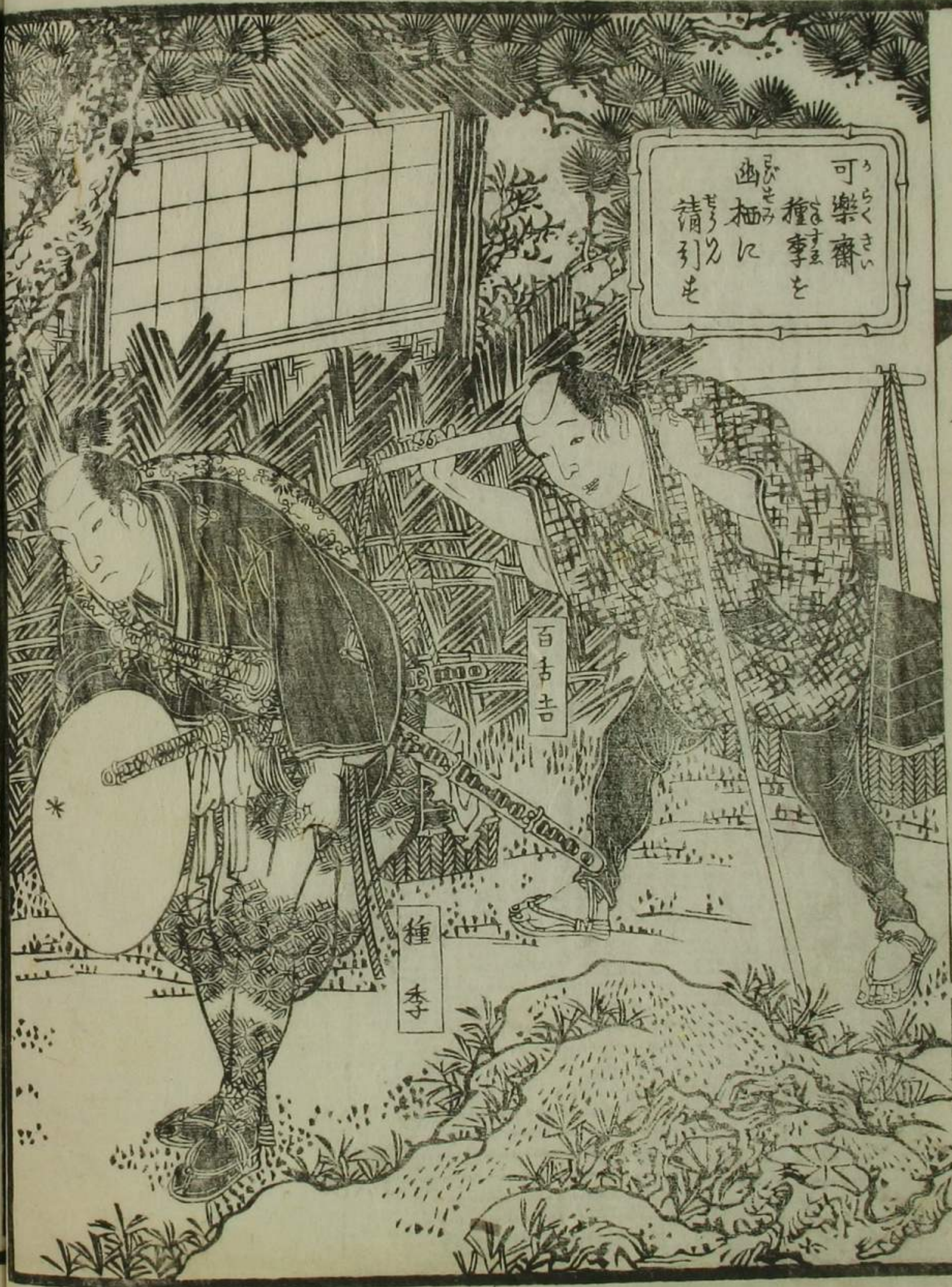
愚老が薦めん該ある小焦慮あるひそ野村めし尚譚之れり  
 此目今より俺白屋へ誘引す。閑談静話せまほし。何首の如く旅宿  
 形り。非如款待の疎齒なりとも。君子の交ハ口腹に故ふあらば願ふ主人も  
 此議を允しむむと請けらる。渡津小航を得ありは。肚裏小喜ふ種季も  
 此の辱し。在下も教を禀ふ。稟本意あるふ争好意も背ふ。直ち閑居小推参  
 べし。侶小主人の請りも茂弥太も今遠兩個の尋常一様の人ありは亦  
 是非常に接待ありて。卻ふその意も稱ふ。這里と那里の遠からて俺  
 が配下の一村をれば。那人那処も逗留するふあふ。いふが賄ハ這方より齋志  
 み門まで可樂齋ぬの補助とせん。術幹ハ幾尋もあふ。と。肚裏小主張て  
 けむ。いふら笑て。然らば君が隨意。賓客が私を貸まめせん。野村の刀柄も  
 介意かく那里も遊び。復ま。這里へ帰り。あふ些少許準備せ。餉もあ  
 る。陳東西小せんも。什麼をれば。小厮小齋せておん伴當も立せ。とて  
 婢小對ひて。快百舌吉小おん伴當に準依させよ。と。退らせれば。可樂齋ハ  
 あふ主人の老實ある。愚老ハ妻子が。獨脚児を。猛可小東儲の不便か  
 らんと猜志ての。率ある。理會ハ。の。締童們的の。兩個の外も。雛婢  
 もあふ。厄溜拵ふ。緯ハ。虧ねど。平生小客が。俺宅を。賓客小用也。衣  
 褥を。恣む。主人小借貸んと欲す。這緯。憑み。あふ。と。を。ち。聴種季  
 も。後弥太も。侶も。眞率を。感。喜。は。は。り。ハ。脱。落。を。黄。昏。時。候。も。  
 奴隷小駝せ。輸り。ま。二。位。も。小。勝。手。へ。り。て。奴。婢。們。小  
 よろ。提。調。仕。ら。權。且。等。せ。急。中。房。へ。赴。は。妻。共。侶。小。藏。獲。を。促  
 言。魚。炙。肉。膾。材。各。種。の。餚。小。煮。滷。漬。菜。鮮。を。一。擔。の。筐。小。納。せ。せ。百  
 舌。吉。小。齋。せ。可。樂。齋。と。種。季。小。從。ひ。準。依。は。ち。も。整。ひ。ぬ。れ。客

吉吉小齋せ。可樂齋と種季も從ひ準依はちも整ひぬれ客  
 言魚炙肉膾材各種の餚小煮滷漬菜鮮を一擔の筐小納せせ百  
 よろの提調仕ら。權且等せ急中房へ赴は。妻共侶小藏獲を促  
 奴隷小駝せ。輸り。ま。二。位。も。小。勝。手。へ。り。て。奴。婢。們。小  
 も。後弥太も。侶も。眞率を。感。喜。は。は。り。ハ。脱。落。を。黄。昏。時。候。も。  
 褥を。恣む。主人小借貸んと欲す。這緯。憑み。あふ。と。を。ち。聴種季  
 も。後弥太も。侶も。眞率を。感。喜。は。は。り。ハ。脱。落。を。黄。昏。時。候。も。  
 奴隷小駝せ。輸り。ま。二。位。も。小。勝。手。へ。り。て。奴。婢。們。小  
 よろの提調仕ら。權且等せ急中房へ赴は。妻共侶小藏獲を促  
 言魚炙肉膾材各種の餚小煮滷漬菜鮮を一擔の筐小納せせ百  
 舌吉小齋せ。可樂齋と種季も從ひ準依はちも整ひぬれ客

房へ急と報告せる間も。等ち不樂たり。兩個の茂弥太も厚く謝志  
 小厮を後方へ後へたる。世俗を離れ、隠士も果斷不快に健雄の心の清  
 水會れ。跟を渾き。ふみの過ぎ己の上刻も。本日の上矢田下  
 矢田。浄法寺の村長故老們。是より六名。昨日の歌を演ると。丹後但馬の  
 縮緬樽酒をどの他。乾折金と稱へて。各若干の金子。と永樂錢の人情を  
 齎せ来ぬほど。種季へ可樂齋許。行後之け。茂弥太撞見て。侶小商量  
 老てのひるやう。俺村より。那野村へ。よびあひの薄儀を。まゐり。是れは那人  
 へ可樂齋と。始り逢ふ。舊相識の像。小話説。志を合し。や。直に那  
 首へ伴を。行へ。弱年けれど。這亦一癖ある。氣象もは  
 是を昂かり。おぬぬ。這人情を。輒に受ら。速莫且。這儘。酒家  
 預措て。緩々地。提計。ん。仕生。とあるに。大家齊。異議も。くら。委任て

芒澤。是れ。後茂弥太より。新十郎。這由を。百方。提樹ぬ。は  
 推事。あ。を。許可。盤纏。今尚。置。あ。移。他人の資  
 助。は。願。止。非除。九牛。一毛。り。村。落。の。う。ち  
 形。能。民。服。七。施。與。之。も。思。之。終。受。り。茂。弥。太。の。強  
 難。復。之。日。来。り。衆。人。の。後。大。家。種。季。が。山。を。登。り。力  
 ある。似。げ。武。勇。の。誇。り。食。を。齊。一。侶。の。感。歎。那。人。の。尚。書  
 年。見。み。血。氣。壯。の。武。士。の。体。也。信。の。優。志。志。操。あり。各。相。伯。大。年。を  
 体。苟。も。村。吏。と。人。を。憐。む。心。薄。を。船。の。徳。の。光。り。初。連。り。元。帥。之。  
 頭。顧。の。光。輝。を。放。門。の。實。小。頭。顧。と。恥。と。これ。彼。も。笑。ひ。り。遂。に  
 野。村。の。隨。也。修。の。意。を。用。ひ。て。各。自。支。配。の。農。戸。の。負。重。を。極。む。寒  
 郷。の。自。然。も。喜。め。く。心。地。を。者。も。互。の。り。之。也。這。皆。後。日。の。話。柄。を。

の次は編せし之に話休題却説可樂齋の種李を伴ふし歸りて在奥の書  
 齋へ請ひぬる回ふ百吉吉の擔げ來し各品の餽饋を雜婢の遞とせし  
 所へ歸りて侍て習字誦讀の弟子ある杏児郎橋推との傳二名の童子の  
 齡を十二と三歳と。恭く師父と。種李を迎へて火盤を供し茶を送り  
 たる進止躁るる也。年も陪る儀容あり。是這頭の里に。馬を用ひし  
 如此老人志登るる家主翁の生平の教あるとぞ知られり。這里の本村の奥  
 ありて樹拉繁糸小阜をぐる。向陽をれば暖く。所得貌小柴鶴鶴の屢か  
 く聲も艶麗なる。籬笆よさける。茶梅花あり。松を庭面を很れり。書よ  
 む窓は月を碍え。梅の檣端よ薫りて。家厩の香を林火ふ。其の幽  
 栖の趣ある。只天然をむねり。敢て人造の巧を弄せ。亦是門に入りて  
 主人此風をりるふ足り。然るに只樞實の孤屋にて。眺望も閑豁形を秘夏  
 を相譚ふる。究竟の地方形れ。種李の両童が次房へ物を空し聲を  
 悄語す。いひるや。里正許めてはけり。道も人も身も同まらば。欲志が  
 ど。他前を憚り。心形らば。黙止して。先生へ仕生ゆる方。在下を操ひ  
 一ふ。教訓を不示る。應に以來。虎狼の世界も。謂はば。亂世。稀  
 なる賢者。光を埋み。査るもの。在下も。厚に惠の一方。故ある  
 辨也。快々是ホの縁由を示る。索れば。領以て。現も然る。訴て。ひえ。  
 迄今人子告り。知らせぬ。唐人醫師の素生を。詳小説て。足下の疑を解あり  
 せん。言條も。听ひぬ。俺這栖所へ。乾淨る。地方形。那二名の。熟童。杏児  
 三橋推。生平。迭代。四五日を隔る。一月。開親許。帰りぬ。開次。日。風も  
 らふ。來て。愚者。使ぬ。性。わの。く。伶俐。け。那。高木。生。の小。廝。百吉。吉。各  
 詮。自性。の。饒。吉。氷。炭。反。七。寡。辭。正。首。形。愚。者。訓。道。守。





きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。
 きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。
 きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。
 きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。
 きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。
 きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。
 きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。
 きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。
 きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。
 きて。一切人の噂せざるの便宜いふをれを新炊の興よ使ひぬ。

ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生
 ばり不知火の肥前を筑紫に欲盡処を。唐土人の種胤を。生

灼方があの皇國にて。妻子を蓄ぬ縁由を原ふ。今を距る百年途之。  
 八九十年以前形々。後土御門院天皇の御宇也。文明十一年三月の所の  
 緯かとも。大内介政弘ぬ。高船を遣て。明國へ渡されぬ。這是の  
 大將軍家。鹿苑院の相國足利のおん時より去て。大内家世々外國通信使  
 の事と嘗りて。明國の勘合印を管り。船を造り禪家の僧を使し  
 して移るむるを。周防國より提計を舊例と用えり。然れど登時  
 使者ふ副らぬ。船中守護の武士ふ杉静江弘直を命せし。弘直去  
 初先三輪之助と喚き。美少年。政弘ぬの寵愛渥也。龍陽なまり。そ  
 の時候は尚二十四五歳ありのから。文武の技拙く。志き健也。日屬よ  
 り主君政弘ふいと正首ふ仕へまらせぬ者ぬれば。這番の任は撰て。浮寝  
 の鳥ら揺れゆく。波路や長紀春の月も又落か。月影り。波間も沈む  
 を趁ふ像よ。只管西を志し。三丁餘里六町をりの大洋に。月極む水や  
 天そらぬく風は。隨せり。心細くも浮みゆく。

西湖の柳枝東風は靡く  
 月老の紅繩海外も繋ぐ

此圖本文の  
 物語の  
 物語の  
 物語の  
 物語の

さる程小杉静江弘直亦大内家の人々の。幾許の日子を歴て。浙江の寧波  
 府つが。恙ぬくを看みける。時小那地也。明の憲宗の成化十五年。丁未  
 也。信て所要の終りなき也。那地は逗番久きなり。徒然中。堪  
 たりけん。有一日下吏ある。壯伎の丙丁們四五名。志記す。静江を。哄誘て。つ  
 々々。俺們おん使の事を。兼り。色を私に。往還を允されざる。海  
 外國へ。數百千里の波濤を凌ぎて。来り。甲斐小這國の。絶景勝地と。聞  
 える。杭州の西湖を一番遊覽せん。這里より。然る。迹に。あり。生涯

小侍いまりが、唐山の光景を帰國に裏ふよりの細らむと、寂り行惜  
 くらぶと強ち不徳漏るを、私直りゆ々とき、あれは後々、伴當才は四五  
 名を従へ、那壯伎們主僕と侶、通計十四五名、寧波府の客館をこら  
 いて、日を累ね、杭州府へ赴た、數日客舎に逗留して、かの名高る西湖  
 の風煙、目を駭く。錢塘は十景を、飽くよ遊賞し、刹へ錢塘の妓院  
 へ遊びて、柳金英といふ名妓は、深き膠漆の情を通じ、這金英といふ  
 柳氏の某甲が女兒ふ。それ時候は、年紀二十歳許ふなり、才色双全  
 美人なり。曩は破瓜は、わりは、財ふ負志、死親の與ふ身を、煙華に沈め、  
 三年前は、双親を、死に死して、憑所なき者あり、志を私直り、あまの田を、  
 確如し人よ、听まより、その孝心と、その薄命を、且感し、且憐み、よ、金英のまて、  
 異邦の人なり、恩と情と、異を、静江に、日屬の、これ、の威あり、晒を

くらば、乃、那、里、一、國、の、一、大、諸、侯、の、近、臣、と、有、理、然、り、あ、ら、ん、憎  
 からぬ、男子、風、流、の、心、を、優、た、人、ふ、あ、ら、ん、と、不、覺、し、慕、ふ、赤、心、に、表  
 裏、り、を、く、り、て、あ、せ、ば、私、直、り、一、倍、不、便、の、者、な、れ、と、送、し、思、ひ、を、傳、へ、恩、愛  
 情、義、眷、戀、の、切、な、心、を、餘、り、終、に、金、英、が、身、を、若、干、に、黃、白、に、贖、ふ、  
 其、の、曲、中、を、心、落、籍、せ、せ、不、日、に、寧、波、府、の、客、舎、へ、歸、り、去、り、尚、旅  
 宿、を、が、ら、も、憂、を、忘、れ、ず、那、金、英、を、侍、奉、ふ、あ、ま、を、ま、り、り、し、心、を、開、成、も  
 暮、る、翌、れ、に、庚、子、歳、有、り、那、里、に、成、化、十、六、年、中、に、大、日、本、を、て、ハ、文、明  
 十、二、年、の、肆、月、と、の、所、要、り、全、く、濟、ぬ、れ、に、船、を、寧、波、と、開、鑄、せ、し、尚、那  
 柳、金、英、を、伴、ふ、周、防、國、へ、歸、り、し、隱、を、あ、ら、ん、と、辨、ち、私、を、政、弘、に  
 一、の、聽、せ、し、む、ん、怒、り、甚、き、く、什、廢、由、杜、の、好、色、を、習、ふ、と、い、ふ、主、の、與  
 異、域、に、使、て、古、より、例、り、多、ぬ、外、國、の、婦、女、を、具、し、て、歸、り、し、油、汰、の、涯

ある白痴うぬ大内が家臣ふ然る鳥侍の者ありとせよ言をんハ酷志記  
 恥辱之とてはり今まで寵をひ 杉弘直も長く弟の暇を賜りて那美  
 人と侶ふ山口の城下より。那処へ移りと去ると忽ち故逐ひけるはさ親  
 去に朋侶もさうなり。君の親族の一黨も王君の御氣色を畏み憚  
 まで。詐ら一個眷る者りぬ。憑む樹下兩漏て涙の滴零小袖濡し。静江  
 日層深き。君は思ふ報ひなく志の遂も果さぬ徳を悔嘆くはみ術  
 り多く戀情の重擔は山口を出てもんと投つたおれど主君の封疆小潛ま  
 り在んい上を蔑如よする小像さふべしと世をゆも心筑紫深の地本國はほ  
 浪来ふけり。這里ハ豊前ハ共小大内殿の采地ぬぐ。豊前ハ豊後の國  
 守る。大友親繁ぬ。大友氏ハ藤原秀郷の流れぬ。姓をへ中原の所領もあ  
 り。又筑前の去る嘉吉元年の冬太宰少貳藤原嘉頼ぬ。武蔵のぬい

室町殿のおん旨ふ従ひ奉らばふれぬを以て我先君大内頼隆の命を謀り  
 りて。征伐あひり。嘉頼ぬ一軍敗て對馬へ逃れ潛みしや。登時より一  
 て筑前の大内家も領あひり。志仁の治おんて。細川勝元朝臣と山名持  
 豊朝臣威を争ひ。列國の諸侯を京都會して戦ふと。寡君大内  
 を率い上洛す。闘戦際於た時を窺ひ。那少貳嘉頼ぬの子あり。を  
 教頼ぬ。嘉吉の始より。二十九年お移り。去る文明二年。對馬より筑  
 前ハ討入りて。舊領の地を復考より。今いそや十年を経りけり。身を容  
 る地方もあんをれぬ。然るも御勘氣の蒙れぬ。阿容と俺王家の敵將  
 有。少貳が領地も民もや。肥前も住むた地方ある。所寓求免て松浦海  
 呼子浦の白屋小膝を容む。今い憚る由をなれ。那柳金英が名をも。免  
 て英とよび。妻とて。良人と喚れて生活術も寫字讀書も央りぬ。童



長九英准兼五崩卷之二

十二



行休英左金五崩卷之二



緩地と志移りしと會意させてゆく後影を目送りてうち含笑み現慧  
 くらても童児を情態の愛をば老の侶よありたりと獨語つ居直り  
 て然きよは是より愚老が父の上より説示をば人嚮にも既演似く  
 俺父陳灼方といふ明國福建の泉州に世々人不知るる醫者入て  
 地方を綽號をば陳藥老と喚了。陳通典が嫡子なりた然るは通典  
 蚤く妻を喪ひて継室を娶りてそれ腹に陳秩典といふ二男を生  
 しぬ。秩典は年を経ぬるが伴の継室を我生係子小家を嗣せんて陳  
 艾（艾とは灸の意）を忌み憎むて宛ら仇冤家の像く思ひよけは只管良人の  
 陳通典は諛言して一家児生平の口舌の罷をたれバ灼方深く是を嘆息  
 て老るる父と継母の心を安んぜんと思ひよれバ千般小介意て歳に三十及  
 ぶやと妻をとり取らるてありたる父を継母と俱小嬌癡兒の陳秩典をのみ

愛覆り愛は潤きて姑息の謗を宵に刺へ後妻の諛を信用て陳灼方と  
 不孝児ありし官府に訴へ罪は隔んとせよ計較既小急ありけしを  
 灼方も官災に係りて冤屈の獄に繫ぐる多と怯るるも終に情由を分  
 疏せ倒し父と継母の罪を發露し肖て家聲を墮せしむるをば  
 一けれ俺小衛の申生の孝をくも守兵の太白の蹤を追て君子國の民と  
 みるんのと主張して情を地一通の書と遺して父の志を知り家と逃れて  
 厦門より商舶に僦得して甚海をら甚さを船日の出方方を指し日の没  
 る處の唐土と心算も出する時をぞ那里明の弘治帝（弘治帝は明の皇帝）  
 十世の至し七世の世に（弘治帝は明の皇帝）の十六年を癸亥に歳ふして大日本の天朝に  
 後柏原院天皇の文龜三年を武將と法住院殿義澄卿（義澄卿は明の大臣）  
 小二十四歳後六のむん時とや片原程は陳灼方いこそ問ふり面らぬ肥の國  
 相國後一位を賜る





死歎び。狄觀官も不用ぬ譚話ふ心の憂を慰めしは是より互み知音  
 りりとも。捨難に思ひありけるほど終つそが女児を娶つともその遺嫁せし  
 形り。信守一后々均方の岳母の英子と。可家小迎へて敬ひ。晚枝と信守夫  
 妻孝た竭ち。侍に養ひつば。英子も憂あとも移く。齡六十を踰ての後小  
 幸アより永正の十こ。這々俺外家祖母にして。愚老が十七歳の時ありき。信守を  
 生平祖母の自家的話とも。確如小听ふより。愚老ハ母晚枝が嫁だとも翌年ある。  
 永正四年小生れ。乳字を文吉とよみ。後小名を奮翰と。一字を文哉と  
 せし。皆父灼方が命けりて。翰墨の場小名を奮高て文才あれり。と此義あ  
 べ。父ハ六十三歳まで享祿の末に終り。母々五十とハハ踰て。天文十五年  
 卒。是より嚮父の尚在せし時小俺小妻とも逐へり。と子小移くも。  
 這も亦天文の末小病死てけり。愚老固り國々と遊歴の志を抱たし。

老る家尊阿嬢小荊妻と入あれむ久くをれり。と黙止まふ。今ハ羈絆  
 の好くありまふ。弘治二年小始め。故郷を辞去り。肥後小赴た。此坑  
 後小遊び。兩年と旅宿小銷て。俺齡も五十ふ。一ッ加へり。同治三年二月の  
 時候小筑前小入り。權五即ち今の。唐人坊小寓せ。此旅  
 宿小診を請ひ。藥を巧ふ者あり。ふと喫醋くどひて。那里此醫  
 師師。計うち集ひ。俺と官府小訴へ。らる。本邑唐人坊小寓居せ。旅醫  
 陳文哉ハ性ぎ。偽藥もて人と騙利を営み。或々己せが治方の即効て  
 術む。貪り。藥性猛烈。酷毒もとも省み。以濫切小劇劑を。用ひて。往人  
 を。最言ふ。と鮮ゆり。外物も。肖ぬ。女奴殺害るり。と搗鬼そ。許すの  
 證據を構え。詭せし。朝家臺々名嶋嶋。隸一地方地方。移れ。名嶋殿  
 の眼代として。厚岩久太夫。季安と。ふ人。在番せられ。下知として。









稱し。子孫今も到はるまで世々琉球の國王となり。這ハ確如なるよしとて疑  
 なくもあらず。又朝夷三郎義秀が祠を朝鮮國釜山浦の絶影島と  
 云ふ地方に今も尚ありといふ。這もまた孟浪の話よりらば途なくも嘉吉の三  
 年若狭國なる武田太郎信廣海を越し蝦夷に入り數十里の地を定  
 め。長々那里の王とをせり。九そ智勇信義の絶世の英雄為朝義秀  
 の所らぶ。武田若狭守信廣の若狭も皆父母の國を離れ海外に漂蕩を家  
 出せ豈そ其志の樂むと云ふらんや。實は己をを得ざるより。是を薄命と  
 いふるならん。然れども義秀の身後小長く神々崇めらるるを思ふに生前その  
 國人の敬服せしを。推量して知られり。まに信廣も松前蝦夷を總督して城  
 を築いて鎮撫志の地名も固く廟宇をも蠣崎と更め齡七十八にして卒す。并  
 子蠣崎宮内少輔光廣五十九歳より民部太輔義廣六十七歳若狭守兼子廣七十二

卒と相續して既ハ四世百二十餘年連綿として榮えり。此ハ這人々の身  
 上なる志を這処に得て翻てあれを那里に得て。それ理ハ什麼もあらん。  
 造化の機關の料をわたり文武人を異るはとも。先生の先考陳君杓方とさも。  
 難を避け家を譲りて遠く海は浮み。その失意薄命の痛あり。思ひ  
 たり皇國ゆ入り安堵する家業之盛なり。一開人の卓絶才よりよりのから。  
 這是陳君の孝順友愛あり。陽報のいそ所とを為す。又那かんみみ  
 外祖母柳夫人金英とのうも然る。それ初身を嚮南に。双親の弱を  
 極ひ。良人小後より數千里の海を渡りてその皇國へ来り。不幸なり。其  
 夫と侶ふ志は。他郷に於嶼されども。圖らば終ハ佳婿を得て。その孝養を  
 受くる。是はその孝と貞との報ひあるべし。人と嘆賞せし。かた不覺あり。此  
 無益の辨ふ我を忘る。長談多言。然るも其痛く。思へば先生

の覇家たつた臺たいふく。執念しつねんくも計較けいけうし小人們せうにんらの與あひ誣あひらせぬひ。窮厄きゆうあつの二條ふたぢうハ在  
 下かも曩なごふ陸奥むつふて。高野たかの弥兵衛やへいゑう舉豪さうごう。初はつち小浪こなみ。とふ互人たがひの可あ為ま。然しかる禍わざはひ  
 羅らりぬと。身み比ひべ。先生せんせいの憂苦ゆうくも然しかる。と同感どうかんふ痛いたみ。一ひと倍ばい。月つき  
 想像おぼろれていぬ。俺おれを説出とけいさんの遅おそくもあつ。先いや俺おれ亡な父ちちが先生せんせいの冤屈わんくつを  
 知し一件いけんと。又また先生せんせいの在あ下したを。曩なごふの掛かの逆旅さかたび店てんより。知られけ。先さ速はや莫な在下した  
 おん身みと。一面いっぺんの相識さうしき人ひとも。あつ。を。忘わすれ。知しせぬ。快々くわい這これ們らの縁ゆかり  
 由よしを示し。あへ。と。問と。き。可う樂らく齋さいハ初はつより。最さい笑わら志しが。不ふ可ふ居ぐ。頭あたまを拾ひろげて。いひる  
 中なか。おん身みの博聞強記はくもんきやうき。和漢夷蛮わくわんいばんの事實じじつを奉たてまつ。議論ぎろんふ卓たつ見識けんしきも。何  
 ら。これ。愉快好話ゆかいこうわ。今日けふも。そ。耳みみも。心こころり。洗あ。若わふ。覺おぼえ。付つ。却かえ目め今いま向むか。し  
 る。と。の。愚ぐ老らうが。方かた僅わずかの自家晤譚みづかみだんの緒つがを。續つづ。い。開頭かいとうの情由じやうゆも。釋と。と。俯うつ。て。誤あや。及およ。び。る。

復讐言石見英雄録第五輯卷之二終

